

## 怒りとその表出に関わる心理学的研究の概観

その他のタイトル	An Overview of Psychological Studies on Anger and Anger Expression
著者	高木 修, 阿部 晋吾
雑誌名	関西大学社会学部紀要
巻	37
号	2
ページ	71-86
発行年	2006-03-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/12310">http://hdl.handle.net/10112/12310</a>

## 怒りとその表出に関わる心理学的研究の概観

高木 修 ・ 阿部 晋吾

### An Overview of Psychological Studies on Anger and Anger Expression

Osamu TAKAGI and Shingo ABE

#### Abstract

In this paper, previous studies about anger and anger expression are overviewed. They are divided into five approaches: (1) Evolutional, (2) Physical, (3) Drive-Behavioral, (4) Cognitive, and (5) Social Constructive. Following an examination of the definition of anger in each approach and showing the relations and differences between them, the direction of future studies on anger and anger expression is discussed.

Key Words: Anger, Anger Expression, Definition of Anger

#### 抄 録

本論文では、怒りとその表出に関わるこれまでの先行研究を、(1)進化、(2)生理、(3)動因-行動、(4)認知、(5)社会構成の5つのアプローチに分けて紹介する。その上で、各アプローチが怒りをどのように定義しているかを検討し、その相違点や関連性を示した上で、今後の研究の方向性について議論する。

キーワード：怒り、怒りの表出、怒りの定義

## はじめに

怒りには他の感情にみられない、特殊な側面がある。通常、喜びや好意といった快感情は対象への接近反応を促進し、悲しみや嫌悪といった不快感情は対象からの回避反応を促進するが、怒りは不快感情の1つであるにもかかわらず、対象への接近反応を促進するという特徴を持つ。そして、その「接近」が他者への暴力や、ときには殺傷にもつながることがある。多くの人は怒りを嫌悪すべき感情であり、できれば感じたくないものと考えている。しかしその一方で、多くの人は日常生活の中で怒りを少なからず感じ、またそれを何らかの形で表出している。

怒りについての論考はアリストテレスやセネカといった、ギリシャ・ローマ時代の哲学者によってもなされており、この感情が人間にとって古くからの関心事象であったことがうかがえる。こうした広い時間軸でとらえると、怒りとその表出についての心理学的研究は、最近100年ほどの間に、非常に多彩な理論的立場から急速に進められてきたといえる。そのため、怒りの定義自体が立場や研究者によって異なり、若干の混乱がみられるのも事実である。

そこで本論文では、怒りとその表出に関するこれまでの心理学的研究を、進化的アプローチ、生理的アプローチ、動因-行動的アプローチ、認知的アプローチ、社会構成的アプローチの5つに大きく分け、その概説を行う。その上で、各アプローチ間の相違点や関連性を示し、今後の研究の方向性について検討する。

## 進化的アプローチ

進化的アプローチは、感情研究の中でも最も古くから研究が進められてきた立場である。このアプローチは進化論を提唱したDarwinにはじまるが、感情を自然淘汰による進化の文脈の中でとらえている。もし、こうした進化論的発想が正しければ、人間は、その進化の過程の一部を、他の哺乳類と共有しているために、人間と他の哺乳類の感情は類似しているはずである。Darwin (1872) は、動物の表情と人間の表情の類似性についての研究を行い、人間の怒りの表情が、攻撃しようとしている犬の唸りの表情と非常に似ていることから、これを怒りの系統発生起源の証拠と考えた。表情以外にも、Darwin (1872) は姿勢、身振り、移動などから人間と動物の感情表出の類似性を検討しているが、その後こうした研究は比較行動学に受け継がれるようになり、心理学においては専ら顔面表情が研究対象として注目されるようになった。その代表的研究者としてEkmanやIzardが挙げら

れる。彼らは数多くの研究から、顔面の感情表出が普遍的であること、すなわち社会的、文化的な影響を受けない、人類が共有する系統発生的なものであることを主張している。例えば、Ekman & Friesen (1971) はこの普遍性仮説を検証するために、西洋人とはほとんど接触機会のなかったニューギニアのある部族に、西洋人の顔面表情の写真を提示し、各感情を表す物語と一致させるように求めた。その結果、怒りを含めた多くの感情において、正答率は非常に高く、感情を表す表情に文化的差異はないことが示された。なお、Ekmanは、怒りの表情を普遍的であると考えているが、どのような状況においてそうした表情を示すかに関しては、文化的規範による制約を受けるとして、これを表示規則と呼んでいる (Ekman & Friesen, 1971)。

また、進化論的アプローチでは、基本的感情という視点から怒りがとらえられることが多い。ここでの「基本的」には、2つの意味が含まれている。すなわち、1) 生存に必要な不可欠な「基盤」であったために、進化の過程で残されてきた、ということと、2) 派生的に生まれたあらゆる感情の根源的な存在である、「基本形」としての単純な感情、ということである (Cornelius, 1996)。Ekman (1984) は6つ、Izard (1977) は10、Plutchik (1980) は8つと、各研究者が掲げる基本的感情の数には差異がみられるが、怒りはいずれもその中に含まれている。ただし、この基本的感情という考え方自体の妥当性については、なお議論の残るところであり、他のアプローチからの批判も多い (遠藤, 1996)。

基本的感情という概念にも含まれているように、進化的アプローチでは、感情を「個体の生存に必要な（あるいは、かつて必要だった）メカニズム」と考える。この考えを発展させた理論として、戸田 (1992) のアージ理論がある。この理論では、感情を行動選択に必要な高度に複雑なシステムであると仮定している。そして、怒りという感情も適応プログラムの1つであり、相手からの不当な搾取を免れ、互いに最大利益を得るよう協力しあうようにさせる機能があると考えられている。この立場では、現代社会において感情が必ずしも適応的に働いていないとすれば、それはかつての野生環境と比べて現在の環境が急激かつ大幅に変化した結果、感情の「進化」がそれに追いついていないためと考えられている。

## 生理的アプローチ

生理的アプローチでは、感情が喚起される際の重要な要因として、生理的覚醒や身体的反応が挙げられており、怒りを含む感情体験は主に身体変化の体験であると考えられている。我々は怒りを感じる時、立毛、発汗、心拍・血圧の増加などの生理的、身体的反応

が生じるが、これを怒りという感情の必要条件と考えるのである。こうした生理的反応が生じる理由としては、「個体が環境に適切に対処するため」という進化的説明がなされることが多い。すなわち、これらの生理的反応は、捕食者に出会うなどの緊急事態に直面したときの、交感神経系の活動亢進と、副腎髄質からのアドレナリン分泌増加を中心とする危急反応、いわゆる「fight or flight（闘争か逃走か）」のための身体の準備状態であると解釈される（Cannon, 1914）。例えば、怒りを感じたときの心拍数の上昇は、個体が敵対者を寄せつけないよう準備するのに役立つと考えられる（Levenson, 1992）。

生理的アプローチの古典的理論として、James-Lange説が挙げられる。この説は「末梢起源説」とも呼ばれ、環境に対する身体的反応こそが感情体験を引き起こす原因であると考えられる。すなわち、悲しいから泣くのではなく、泣くから悲しい（James, 1884）のであり、身体的反応を解釈することによって特定の感情が喚起されるというものである。ここでの身体的反応とは、内臓活動の変化と、姿勢や顔面表情の変化を含むものである（Cornelius, 1996）。James-Lange説は、その後Cannonから激しい批判を受けた。Cannon（1927）は、1）動物実験において中枢神経系から内臓を完全に分離しても、感情行動は変化しないこと、2）内臓変化はJames-Lange説が指摘するような各感情に特異的なものではなく、区別することはできないこと、3）環境の知覚から内臓変化が生じるまでには時間がかかるため、瞬時に生じる感情を説明できないこと、などから、内臓変化が感情経験よりも先行しているとは考えにくいと結論づけた。

それに対してSchachterは、James-Lange説を修正した2要因説を提唱し、身体的反応と状況認知の2つが感情を決定する上での重要な要因であることを主張した。Schachter & Singer（1962）の実験では、まず被験者は興奮剤であるエピネフリンを注射され、その後、幸せそうな様子のサクラと一緒に同じ部屋で待機する条件（幸福条件）と、怒った様子のサクラと一緒に待機する条件（怒り条件）のいずれかに割り振られた。その結果、幸福条件の被験者は自分も幸福感を経験しやすいのに対して、怒り条件の被験者は、自分も怒りを経験しやすいことが明らかとなった。しかも、最初にエピネフリンを注射しない場合には、いずれの条件においてもこうした感情体験は生じにくいことも明らかとなった。この結果より、身体的反応は確かに曖昧な側面もあるが、感情の生起には必要であることが示唆された。また、この実験結果は感情喚起における認知的評価の重要性も示唆しており、後述の認知的アプローチとも関連がある。

なお、「怒り」と「恐怖」の身体的反応は同一であり（「闘争か逃走か」反応）、区別することはできないというCannon（1927）の指摘に対しては、必ずしもそうではないこと

を示す研究もいくつかみられる。Ax (1953) は実験室実験によって、心臓血管活動、呼吸、筋肉運動など14の生理的指標のうち、7つの指標において怒りと恐怖の間に差異がみられることを明らかにしている。Ax (1953) 以降の研究においても、怒りは恐れと比較した場合、心拍数と拡張期血圧の増加および高い皮膚表面温度という特徴があることが確認されている (Ekman, 1984; Levenson, 1992; Schwartz, Weinberger, & Singer, 1981)。

また、Tomkins (1962) の顔面フィードバック仮説は、顔面表情と感情経験の関係から、James-Lange説を支持するものといえる。この仮説では、顔面にある筋肉と腺の生得的な反応パターンが感覚としてフィードバックされた結果、感情が生じると考えられている。すなわち、特定の表情筋の組み合わせによる表情パターンが、即座に脳にフィードバックされ、それに応じて感情が喚起されると想定されている。実際に、いくつかの研究において、怒りや幸福の顔面表情を予め作ることで、それに対応した感情が引き起こされることが示されている (例えば、Laird, 1974; Strack, Stepper, & Martin, 1988)。

このように、生理的アプローチの発展によって、身体反応と怒りという感情体験との個人内での関連性については膨大かつ詳細なデータが得られるようになったが、このアプローチの最大の問題点は、結局のところ、何が怒りの源泉となる身体反応を引き起こしているのかが不明確だという点である。すなわち、我々が、どのような状況に置かれたときに怒りを感じるのかについての説明が、この立場においてはほとんどなされていない。「闘争か逃走か」反応が引き起こされるような危急事態、といったおおまかな状況が示されることもあるが、これだけでは複雑な感情体験の全てを説明することは不可能である。

### 動因—行動的アプローチ

次に挙げられるのが、動因 - 行動的アプローチである。これは怒りというよりも、その表出反応の一つである攻撃行動に関する理論的立場であり、怒りを中心とする不快感情によって、攻撃行動が引き起こされるプロセスを扱う立場である。動因—行動的アプローチの古典的な理論としては、DollardらYale学派による欲求不満—攻撃説 (Dollard, Doob, Miller, Mowrer, & Sears, 1939) が挙げられる。ここでの欲求不満とは、ある目標に向かって行動が開始され、目標達成のための努力が始まったにもかかわらず、それが途中で妨害された状態のことを指す。彼らの理論はFreudの精神分析の理論が基盤となっており、満たされない衝動エネルギーを八つ当たりや物への攻撃など、どんな形でも構わないから外部に表出することで、攻撃動因が低減するという前提に立つ。そして、あらゆる攻撃行動の基盤には必ず欲求不満が存在し、また欲求不満は常に何らかの形の攻撃を引き起こすと

主張した。その後、この立場の代表的論者となったBerkowitz (1962) は、欲求不満-攻撃説に修正を加えた、攻撃手がかり説を提唱している。彼の説では、不快感情によって生起する攻撃へのレディネスと、状況内の手がかり刺激によって、攻撃行動が生じるとしている。Berkowitz & LePage (1967) は、どのような状況において欲求不満が攻撃行動を生じさせるかを検討するための実験を行い、攻撃手がかり（武器など、攻撃を連想させる刺激）の重要性を明らかにしている。この実験では、欲求不満によって不快感情が喚起された状態にある被験者は、攻撃を連想させない、中性的な物体（バドミントンのラケット）が置いてある状況よりも、武器が置いてある状況において、より攻撃的に反応しやすいことが示された。その後の多くの研究においても、欲求不満を感じた被験者が攻撃を実行するかどうかには、攻撃手がかりが影響していることが確認されている（Carlson, Marcus-Newhall, & Miller, 1990）。さらに、Berkowitz (1989) は近年、認知的新連合理論を提唱している。この理論では、知識構造のネットワークによって、攻撃に関連した感情や認知が活性化されると、それにともなって攻撃行動も活性化されるとしている。つまり、攻撃に関連する認知要素であれば、どのようなものでも攻撃行動を活性化するとしており、その認知構造はややあいまいで、表出自体も衝動的なものと仮定しているところが大きな特徴である。

### 認知的アプローチ

感情研究において、1960年代以降に主流となったのが認知的アプローチである。認知的アプローチでは、感情の発生における思考の役割を強調し、環境の中での出来事に対する個人の評価から、いかに感情が生じるかという点に焦点をあてている。生理的アプローチでも紹介したとおり、Schachterの2要因説も認知的評価を重視しているが、彼の説では、「自分がなぜ今興奮状態にあるのか分からない」といったような非常に限定的な状況についての説明しかできない。認知的アプローチの先駆者であるArnold (1960) は、生理的アプローチの諸理論が、身体的変化を最初に開始させるのはどのような過程かという論点を避けていることを指摘した。すなわち、対象を単に知覚するだけではそれが有害かどうかを判断することはできず、「闘争か逃走か」反応を引き起こすためにも、その対象についての「評価」が必要であると主張した。たとえば怒りは、ある出来事を「フラストレーションを起こさせる」有害なものであるが、「克服できる」ものとして評価した場合に生じるとArnold (1960) は考えた。

Arnoldの考えを発展させたのがLazarusである（Lazarus, Averill, & Opton, 1970）。

Lazarusにとって感情とは、知覚した環境に対し、有害あるいは有益と評価したことを適切に処理するための準備反応であり、「評価」とは、「関係の意味」、すなわち、「個人が直面している状況の中にみる、個人的幸福のための特定の意味」を具現化している概念である（Smith & Lazarus, 1993）。Smith & Lazarus（1993）は、状況の評価パターンには2種類のレベルがあるとしている。すなわち、状況の評価するために行う個々の判断である「個別的評価要素」と、個別的評価を結びつけ、その状況の感情的な意味を作り出す「中心的関係テーマ」である。たとえば、ある出来事の個別的評価要素が「自己の目標と関係があり」しかも「その目標と一致せず」「その責任が他者」である場合、これらが一緒になって、相手を非難すべき「私を貶める攻撃」という中心的関係テーマが形成され、これが怒りの感情を生成すると考える。Smith & Lazarus（1993）は質問紙実験によって、彼らの理論にもとづいて場面操作を行うことで、予測どおりの感情が引き起こされることを確認している。

このように、特定の認知要因と特定の感情を構造化して捉える立場は「構造説」とも呼ばれ、多くの研究者によってその試みがなされている（たとえば、Frijda, Kuipers, & ter Schure, 1989; Roseman, 1984; Scherer, 1982; Smith & Lazarus, 1993; Weiner, 1986）。彼らは、特定の感情に関連した認知は全て、比較的少数の基底となる意味、つまり「次元」を反映している、と考えている。たとえばRoseman（1984）は、「状況の状態」「作用因」「強さ」などの認知次元を想定しており、怒りが生じるのは、「動機と不一致」の状態が作り出された原因が「他者」にあり、その他者よりも自分が「強い」と認識している場合であるとしている。それ以外の研究者も含めて、怒り感情の認知的次元としてよく挙げられるものには、出来事の快・不快に関する判断である「快適性」、その出来事が個人にとってどの程度重要かに関わる「目標関連性」、誰がその出来事を引き起こしたのかに関する「主体性」、出来事の発生を制御することができたのかどうかに関わる「統制可能性」などがある（大淵, 1999）。

攻撃行動研究の文脈においても、他者との関係の中で規定される社会的要因をより重視し、それに対する認知的評価過程によって、怒りや、その表出反応としての攻撃行動が引き起こされると考える立場がある。Rule & Ferguson（1984）は意図性、動機の正当性、制御可能性という認知要因を組み合わせた責任帰属の三次元モデルを提唱しており、「意図的で不当な動機」あるいは「非意図的で制御可能」な原因によって被害を受けたときに、怒り感情や報復的な攻撃行動が生起すると想定している。

こうした認知的要因が感情経験に重要な影響を及ぼしていることは、うつ病など感情に



関わる精神障害の治療において、個人の認知的解釈の変容を試みるBeck (1976) の認知療法が大きな成功を収めていることから裏づけられており、最近では怒りのコントロールを目指した認知療法的アプローチが顕著な効果をあげている (DiGiuseppe & Tafrate, 2003)。しかし、認知的アプローチに対する批判も少なからず見受けられる。もっとも激しい批判を行っているのはZajoncである。Zajonc (1980) は、感情の発生には認知過程は必要ではなく、多くの感情反応は、認知活動が生じる時間がないうちに発生しており、認知と感情は独立したシステムであると主張した。Lazarus (1982) はこの批判に対して、感情は完全に情報処理された後に生じるわけではなく、個人は出来事の全てが明らかになる前から少しずつその状況を評価し続けており、情報処理の初期段階での刺激に反応してなされる迅速な評価においても感情は喚起され、さらにその際の反応がその後の評価過程を方向づけるとしている。また、Zajonc (1980) が自論の裏づけとして示した研究はいずれも、「好き-嫌い」といった非常に単純な感情判断についての研究であり、怒りのような複数の構成要素によって生じる感情にはZajoncの理論は当てはまらないとも言われている (Cornelius, 1996)。

Zajonc (1980) に対するLazarus (1982) の反論の中でも引用されているのが、認知的アプローチと生理的アプローチを組み合わせたMandler (1975) の理論である。Mandler (1975) はSchachterと同様に2要因説を唱えたが、認知的評価は単に感情をラベルづけるためのものだけでなく、生理的覚醒の原因となる環境での出来事の意味内容を克明に分析していく過程でもあると考えている。そして、このような意味内容の分析を通じてさまざまな環境での出来事が自律神経系の興奮をもたらすような刺激に変換されていくのであり、このような刺激によって覚醒状態がもたらされるようになるものと考えられるのである。すなわち、Mandler (1975) は覚醒状態と認知的評価の相互作用によって感情は生じると考えており、これは、Schachter理論の欠点を補うものともいえる。

また、攻撃行動からのアプローチではあるが、大淵 (1993) が提唱している攻撃の二過程モデルは、動因-行動的アプローチと認知的アプローチを組み合わせたものといえる。すなわち、攻撃行動は不快感情によって自動的に生じる非制御的なプロセスと、高次の認知処理を介する制御的なプロセスの二つによって規定されるというものである。

こうしたLazarusとZajoncの立場の違いや、Mandlerの二要因説、大淵の二過程モデルを脳神経の構造からうまく説明できるものとして、LeDoux (1987) の二経路説がある。LeDoux (1987) によれば、感情の処理過程には二つの経路があり、一つは扁桃体を中心とする辺縁系を経由する経路である。これは刺激に対して即時的に反応するいわば自動的

な処理過程である。もう一つは、大脳新皮質を経由した上で、扁桃体に収束していく経路であり、より高次の認知過程を経る処理過程といえる。通常は辺縁系での処理に新皮質からの入力が増えらることで感情表出は調整されるが、刺激が強烈であったり急激であったりすると新皮質の調整が省略され、感情が暴発的に表出されてしまう場合があることを LeDoux (1987) は指摘している。

### 社会構成的アプローチ

最後に、感情の社会構成的アプローチについて説明する。この立場では怒りを含む感情を社会的なものとして捉え、感情が主として生物学的現象であるという進化的アプローチや生理学的アプローチの仮定を認めない。また、感情は Ekman の考える表示規則 (Ekman & Friesen, 1971) のように、文化によって制約を受けるだけでなく、むしろ、感情そのものが文化の産物であることを主張する。すなわち、感情を、人間の系統発生の名残としてとらえるのではなく、社会的に構成された、何らかの社会的機能を持つものとする。したがって、感情は、社会的レベルの分析でのみ完全に理解されうると主張する (Averill, 1982)。怒りについても、この感情に生物学的要素が含まれていることは認めているものの、怒りの経験全体を理解するには、評価、行動、経験、そして怒りの機能が、社会的規則によりいかに形成されているかを分析しなければならないと考えられている。したがって、この立場においては、怒りの個々の原因というよりも、それを取り巻く社会・文化的環境に注目し、怒りを表出することがどのような社会的機能を果たしているのかという、よりマクロな視点から議論がなされている。

この立場の代表的な論者である Averill (1980, 1982) は、怒りを欲求不満に対する原始的な反応ではなく、対人関係を調整するのに役立つ、高度に洗練された感情であると考えている。そして、怒りは送り手と受け手の双方にとって不快な経験であることは確かであるが、長期的に見れば社会的な機能を持つ、いわば「苦い薬」のようなものであると述べている (Averill, 1982)。また、怒りは道徳的判断を含むため、悪事の修正、道徳的価値体系の維持、社会規範の確認などにも役立っていると主張する。Oatley (1992) も、怒りを複雑な社会的感情としてとらえており、怒りを表出するということは、個人が自分の期待と権利を侵害されたと感じているということ、他者に確実に伝えることになるとしている。そして、Averill (1982) の研究を引用しながら、怒りの表出は、行為者が複雑な社会的相互作用の中で、自分の役割を「再交渉」する方法の1つとしてみなすことができると論じている。

こうした観点に立てば、怒りの誘因となるのは、他者の行動に、不当性と故意性を認知したときや、道徳的秩序・社会規範の逸脱を認知したときなどが挙げられる。これに関して大淵（1999, 2000）は、従来の認知的アプローチが重視してきた自己利益の侵害に対する怒りだけでなく、規範逸脱に対する怒りも存在することを指摘している。ある状況における特定の行動に対する不当性、故意性、逸脱性の認知は、所属する社会や文化に大きく影響を受ける。すなわち、その行動をどのように評価するか、そのときどのような行動を採用すべきか、あるいはそもそも怒りの経験とはどのようなことか（怒るまたは怒られるとはどういうことか）は、特定の文化的状況の、特定の道徳的秩序に沿って学習された意味（社会的規則や社会的文脈）によって決められる。たとえば、欧米社会において共有されている怒りの「規則」として、Averill（1993）は次の7つを挙げている。1）意図的な不正と制御可能な過失に対して、個人は怒る権利と義務がある。2）怒りは、自分の行為に責任を持つことのできる対象に向けられるべきである。3）怒りは無実の第三者に向けられるべきではないし、挑発以外の理由によって対象者に向けられるべきではない。4）怒りの目的は、状況をただし、公正を回復し、再発を防ぐことであるべきであって、対象者を傷つけることや、脅しによって利己的な結果を得ようとするべきではない。5）怒りの反応は挑発とバランスが取れていなければならない。6）怒りは挑発の直後に起こるべきであり、必要以上に長く継続すべきではない。7）怒りは関与と解決を含んでいなければならない。

こうした社会構成的アプローチの中心にあるのは、感情の経験と表出は、学習された慣習あるいは規則に左右され、文化によって感情の表現の仕方と概念化の方法が異なり、異なる文化では感情の経験と表出方法も違ってくるという考え方である。事実、社会構成的アプローチの研究では、感情の概念化や経験における異文化間の差異が報告されている。例えば、Rosaldo（1980）、およびAverill（1990）は、フィリピンの部族であるイロンゴット族の首狩り行為に結びついた、「リゲット」と呼ばれる怒りに似た感情について論じている。欧米社会における怒りは、社会的規範からの逸脱に対して、言語的表現によって表出されることが多いのに対して、このリゲットは、首狩りという身体的攻撃のみに結びついた極めて特殊な感情である。それは首を狩る相手が誰であっても、たとえ自らに危害を加えていなくても発せられるのである。

ただし、こうした感情の概念化や経験についての異文化間の多様性に関する証拠には、かなり議論の余地が残されている。進化的、あるいは生理的アプローチをとる研究者は、感情が本当に社会構成的アプローチの指摘するような文化的多様性を持つものなのかを疑

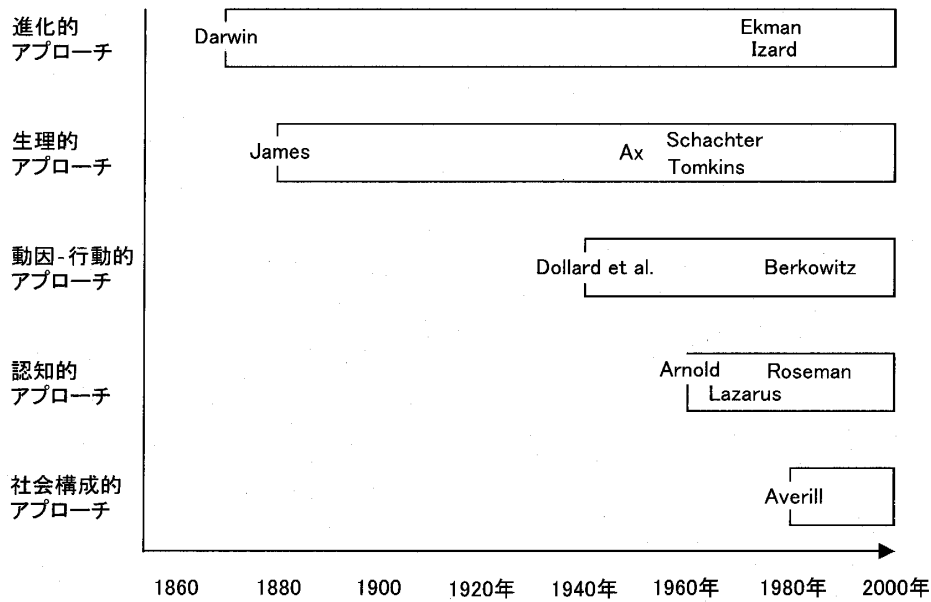


Figure 1 怒りとその表出に関する各アプローチと代表的な研究者

問視している。こうした批判の中には、社会構成的アプローチの提示した異文化間データの信頼性、妥当性に対する疑問や、データが主に一時的な性質のものであるとする主張 (Izard & Phillips, 1989) など見受けられる。

### 各アプローチにおける怒りの定義

冒頭でも述べたとおり、怒りの定義は立場や研究者によってさまざまであり、一般的な同意がない (Rubin, 1986) とまでいわれている。その原因は、各アプローチの注目する怒りの側面が異なることにある。

進化論的アプローチでは、文化を超えて普遍とされる、顔面表情によって怒りが定義される場合が多い。Ekman & Friesen (1975) によると、怒りの表情の特徴は、引き寄せられた眉と緊張したまぶた、および閉じて「上下の唇を押しつけた」口、あるいは開いた「四角い」口のいずれかである。「怒りを示す口」は2種類あることになるが、前者は攻撃的な行動をとるときによく見られ、後者は言葉で怒りを表現しているときによく見られるという。

生理的アプローチの立場からは、怒りを身体的、生理的な変化とその感覚に基づいて定義することになるだろう。すなわち、怒りは「心拍数と拡張期血圧の大幅な増加と、高い皮膚表面温度をもたらす感情で、顔の火照りや筋肉の緊張、心臓の鼓動の高まりといった感覚を伴い、何かを殴りつけたり、引き裂いたりしたい衝動 (Arnold, 1960) を伴う」と

いう説明になる。

認知的アプローチでは、他者や状況をどのように評価したときに怒りを感じるのかが定義の際に重要となるであろう。先述の認知構造説における、怒りの認知次元としてよく挙げられるものを組み合わせることで、「どのようなときに生じる感情か」という視点から怒りを定義することは可能である。すなわち、「快適性」「目標関連性」は被害の大きさに関わる次元であり、「主体性」「統制可能性」は他者の責任性に関わる次元であると考えられるので、「個人が何らかの被害を受け、その被害の責任が特定の他者にあるときに生じる感情」と定義することができる。

社会構成的アプローチでは、怒りに対して単一の定義を行うこと自体が疑問視されている。Averill (1980) は、怒りを含めた感情には同時的に発生しやすい、複数の要素が含まれていると主張しており、感情を多元的に構成された「シンドローム」としてとらえている。彼の指摘した複数の要素とは、感情と関連した特定の感覚である「主観的経験」、感情に伴う顔面表情と身体姿勢である「表示反応」、自律神経系およびその他の身体変化である「生理的反応パターン」、感情的になっている時に行う行動である「対処反応」の4つである。そして、これら4つのいずれかを含まない感情もあるし、同じ感情であっても、あらゆる場合において全ての要素が含まれる必要はないと考えた。したがって、感情は、「数の限定された特徴では定義できない」としている。すなわち、怒りを含めた感情とは、様々な側面を持つ現象の総体であり、その定義は、社会や文化によって規定されていると考えるのである。

こうした社会構成的アプローチの立場に立てば、怒りという感情の定義はできないことになる。しかし、ある程度抽象的な概念を用いれば、完全にではないにせよ、どの立場からも一定の同意が得られるような定義も可能であるように思われる。たとえば湯川 (2004) は、怒りを「自己もしくは社会への物理的もしくは心理的な侵害に対する、自己防衛もしくは社会維持のために喚起された、心身の準備状態」と定義しており、怒りが生理、心理、社会的な側面からなる感情であることを表現している。

## まとめ

以上、5つのアプローチについて概観してきたが、最後にそれぞれの立場の相違点と関連性について整理しておきたい。怒りが生得的なものなのか、それとも文化的な背景をもとに後天的に形成されるのかという問題については、進化的アプローチと社会構成的アプローチは正反対の立場を取っている。生理的アプローチは、進化的アプローチの立場を基

盤として、個体内での身体反応と怒りの主観的経験との関連性について詳細に検討したものと見えよう。動因・行動的アプローチは他のアプローチとの接点は少ないが、怒りとその表出を衝動的で非合理的なものとしてとらえる点では、現代社会における怒りを、「進化の過程の遺物」とみなし、役に立たないと考える進化的アプローチと類似しており、認知的アプローチ、社会構成的アプローチとは正反対の立場を取っている。認知的アプローチと社会構成的アプローチには密接な関連性がある。認知的アプローチにとって重要なのは、怒りが、環境に対する特定の価値づけを行う認知、すなわち評価によって生じるという仮定である。一方、社会構成的アプローチは、この仮定に同意しながら、さらに一步踏み出して、人が環境を評価する方法は社会や文化によって決められると主張している。つまり、認知的アプローチは状況判断から感情発生に至るまでの個人内プロセスに重点を置いた立場であり、社会構成的アプローチはそうした状況判断を生み出している社会、文化全体の構造に目を向けている立場といえる。

以上のことから、各アプローチは完全に独立して成り立っているものではなく、他のアプローチからの影響を少なからず受けながら発展してきたものであることが理解できる。また、同じ怒りという現象に対して、立場間で正反対の主張をしているものもあるが、それは各立場の掲げる定義に如実にあらわれているとおり、立場によって注目する怒りの側面が異なるためと考えられる（Figure 2）。進化的アプローチは身体反応に注目し、生理的アプローチは感情と身体反応の関連性に注目している。動因・行動的アプローチは感情（あるいは動機）が行動を引き起こすプロセスに注目し、認知的アプローチは認知的評価が感情にどのような影響を及ぼすかに注目している。社会構成的アプローチは、こうした怒りの現象全体がどのような社会・文化の中で作り出されているのかに注目している。し

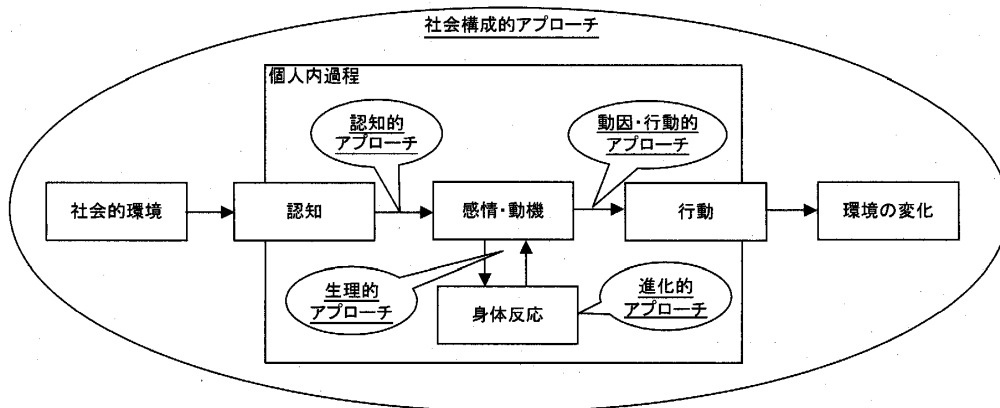


Figure 2 各アプローチの注目する側面

たがって、どのアプローチが最も優れているのか、あるいは正しいのかという議論は無意味であり、こうした様々な側面から得られたデータを総合して吟味していくことで、怒りという複雑な現象全体を理解するための、より有益な知見が得られるものと思われる。今後の怒りと表出に関する研究においては、こうしたアプローチ間の知見を統合していく作業がいつそう重要になっていくであろう。

#### 引用文献

- Arnold, M. B. 1960 *Emotion and personality*. New York: Columbia University Press.
- Averill, J.R. 1980 The emotions. In E. Staub(Ed.), *Personality: Basic aspects and current research* (pp.134-199). Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Averill, J.R. 1982 *Anger and aggression: An essay on emotion*. New York: Springer-Verlag.
- Averill, J.R. 1990 Emotions in relation to systems of behavior. In N. L. Stein, B. Leventhal, & T. Trabasso (Eds.), *Psychological and biological approaches to emotion* (pp. 385-404). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Averill, J.R. 1993 Illusions of anger. In R.B. Felson & J.T, Tedeschi (Eds.), *Aggression and violence: A social interactionist perspective*. Washington, D.C.: American Psychological Association. 171-192.
- Ax, A.F. 1953 The Physiological differentiation of fear and anger in humans. *Psychosomatic Medicine*, 15, 433-442.
- Beck, A.T. 1976 *Cognitive Therapy and the Emotional Disorders*. New York: International Universities Press.
- Berkowitz, L. 1962 *Aggression: A Social Psychological Analysis*. New York: McGraw-Hill.
- Berkowitz, L. 1989 The frustration-aggression hypothesis: An examination and reformulation. *Psychological Bulletin*, 106, 59-73.
- Berkowitz, L. & LePage, A. 1967 Weapons as aggression-eliciting stimuli. *Journal of Personality and Social Psychology*, 7, 202-207.
- Cannon, W.B. 1914 The interrelations of emotions as suggested by recent physiological researches. *American Journal of Psychology*, 25, 256-282.
- Cannon, W.B. 1927 The James-Lange theory of emotion: A critical examination and an alternative theory. *American Journal of Psychology*, 39, 106-124.
- Carlson, M., Marcus-Newhall, A., & Miller, N. 1990 The effects of situational aggression cues: A quantitative review. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 622-633.
- Cornelius, R.R. 1996 *The science of emotion: Research and tradition in the psychology of emotion*. Upper Saddle River, NJ: Prentice-Hall.
- Darwin, C. 1872/1965 *The expression of emotions in man and animals*. Chicago: University of Chicago Press.
- DiGiuseppe, R. & Tafrate, R.C. 2003 Anger Treatment for Adults: A Meta-Analytic Review. *Clinical Psychology Science & Practice*, 10, 70-84.
- Dollard, J., Doob, L.W., Miller, N.E., Mowrer, O.H. & Sears, R.R. 1939 *Frustration and Aggression*. New Haven: Yale University-Press.
- Ekman, P. 1984 Expression and the nature of emotion. In K. Scherer and P. Ekman (Eds.), *Approaches to*

- emotion* (pp. 319-343). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Ekman, P. & Friesen, W.V. 1971 Constants across culture in the face and emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 17, 124-129.
- Ekman, P. & Friesen, W.V. 1975 *Unmasking the face: A guide to recognizing emotions from facial clues*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall.
- 遠藤利彦 1996 喜怒哀楽の起源：情動の進化論・文化論 岩波科学ライブラリ 岩波書店
- Frijda, NH, Kuipers, P., & ter Schure, E. 1989 Relations among emotion, appraisal, and emotional action readiness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 212-228.
- Izard, C. 1977 *Human emotions*. New York: Plenum.
- Izard, C.E., & Philips, R.D. 1989 Emotions from a different perspective (Review of Rom Harre's "The social construction of emotion"). *Contemporary Psychology*, 34, 362.
- James, W. 1884 *What is an emotion?* *Mind*, 19, 188-205.
- Laird, J.D. 1974 Self-attribution of emotion: the effects of facial expression on the quality of emotional experience. *Journal of Personality and Social Psychology*, 29, 475-486.
- Lazarus, R.S. 1982 Thoughts on the relations between emotion and cognition. *American Psychologist*, 37, 1019-1024.
- Lazarus, R.S., Averill, J.R. & Opton, E.M. 1970 Toward a cognitive theory of emotion. In M.B. Arnold (Ed.), *Feelings and emotions* (pp. 207- 232). New York: Academic Press.
- Ledoux, J. 1987 Emotion. In F. Plum (Ed.), *Handbook of Physiology. Section I. The nervous system: Vol. 5, Higher functions of the brain* (pp. 419-460). Bethesda, MD: American Psychological Association.
- Levenson, R.W. 1992 Autonomic nervous system differences among emotions. *Psychological Science*, 3, 23-27.
- Mandler, G. 1975 *Mind and Emotion*. New York: Wiley.
- Oatley, K. 1992 *Best laid schemes: The psychology of emotions*. New York: Cambridge University Press.
- 大淵憲一 1993 セレクション社会心理学- 9 : 人を傷つける心- 攻撃性の社会心理学- サイエンス社
- 大淵憲一 1999 怒りと社会的認知：自己利益の侵害と規範逸脱の知覚 東北大学文学部研究年報, 49, 213-224.
- 大淵憲一 2000 怒りの比較文化研究：規範逸脱の次元と怒り感情及び罰願望に対するその影響 東北大学文学部研究年報, 50, 172-184.
- Plutchik, R. 1980 *Emotion: A psychoevolutionary synthesis*. New York: Harper and Row.
- Rosaldo, M.Z. 1980 *Knowledge and Passion: Ilongot notions of the self and social life*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Roseman, I.J. 1984 Cognitive determinants of emotions: A structural theory. In P. Shaver (Ed.), *Review of Personality and Social Psychology* (Vol. 5, pp. 11-36). Beverly Hills, CA: Sage.
- Rubin, J. 1986 The emotion of anger: Some conceptual and theoretical issues. *Professional Psychology: Research and Practice*, 17, 115-124.
- Rule, B.G. & Ferguson, T.J. 1984 The relations among attribution, moral evaluation, anger, and aggression in children and adults. In A. Mummendey (Ed.), *Social psychology of aggression* (pp.143-156). New York: Springer-Verlag.
- Schachter, S., & Singer, J. 1962, Cognitive, Social, and Physiological Determinants of Emotional State, *Psychological Review*, 69, 379-399.
- Scherer, K.R. 1982 Emotion as a process: Function, origin, and regulation. *Social Science Information*, 21,



555-570.

- Schwartz, G.E., Weinberger, D.A., & Singer, J.A. 1981 Cardiovascular differentiation of happiness, sadness, anger, and fear following imagery and exercise. *Psychosomatic Medicine*, 43, 343-364.
- Strack, F., Martin, L.L., & Stepper, S. 1988 Inhibiting and facilitating conditions of the human smile: A nonobtrusive test of the facial feedback hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 768-777.
- Smith, C.A., & Lazarus, R.S. 1993 Appraisal components, core relational themes, and the emotions. *Cognition and Emotion*, 7, 233-269.
- 戸田正直 1992 感情：人を動かしている適応プログラム 東京大学出版会
- Tomkins, S.S. 1962 *Affect, imagery, consciousness. Volume 1: The positive affects*. New York: Springer.
- Weiner, B. 1986 *An attribution theory of motivation and emotion*. New York: Springer-Verlag.
- 湯川進太郎 2004 怒りをコントロールできない子—鎮静化の過程に関する研究から— 児童心理2004年2月号 (No.800) (p.96-99) 金子書房
- Zajonc, R.B. 1980 Feeling and thinking: Preferences need no inferences. *American Psychologist*, 35, 151-175.

—2005.11.21受稿—